

『夏至の夜のホタル』

桑原 紀子

今年の夏至は、6月22日、ぐんぐん気温が上がリ、30度を越しました。源氏ボタルが飛ぶかもしれないと、友人たちと、夕方小野路の山間の湿地に向かいました。夏至とはいえ、8時近くなるとさすがに谷戸の道は暗く、ぬかるんで、ドクダミの白い花がぼんやりと浮き上がっています。

少し開けた場所に着くと、私たちは蛙の声に包まれて、夜の空気を吸い込みました。かすかに青草の匂いがしています。

ツと茂みから光りが現れ、フワリと浮き上がりました。もうひとつ、ゆるやかに点滅しながら飛んでいます。平家ボタルより、大きく明るい光り、源氏ボタルです。ずっと向こうの山間でも光っています。湿地を越えてこちらに飛んで来たので、私たちは喜んで、「おいで！おいで！」と呼びました。友人が両手をあげると、光りに届き、手のなかに落ちてきました。両手でそっと包むと、光りが点滅して、ホタルの鼓動のようです。放すとツと飛んでいくので、懐



中電灯で確かめると、固い前翅の下の柔らかい翅を広げて飛んでいます。弱々しく見えても、やはり甲虫の仲間の飛び方です。

10数匹のホタルを楽しんでの帰路、道脇の背の高い草の葉に光るものがあります。ホタル？と、顔を寄せ合って調べたら、灯に照らし出されたのは、ホタルの幼虫でした。親とは似ても似つかぬ姿ですが、お尻の光りが点滅して、素性がばれました。これから土に潜って蛹になるのだとしたら、時期的には平家ボタルの幼虫でしょう。「これが飛ぶ頃、また来ようね」と、友人が呟きました。

山道を帰っていくと、細い水路の藪に、無数の光りが集まっていました。この水路で羽化したホタルたちが、しばらく留まって成熟を待つのでしょうか。充分成熟した後、光りを点滅させながら、相手を求めて谷戸田に向かうのです。ホタルの恋が成就して、沢山の卵が生まれますように、この谷戸や水路に小さな光りが続きますように、と、祈らずにはいられません。